

大学生の体験的アイデンティティ感覚の研究 I—方法論の検討

Study on Experiential Sense of Identity 1: discussion on methodology.

飯 沼 和 希*

Kazuki IINUMA

要旨：「体験的アイデンティティ感覚」は「わたし」がわたしである体験であり、自身の体験が「わたし」にとって「しっくり」くる感覚である。この概念はアイデンティティに対する体験的・現象学的アプローチとして位置づけられる。本研究では、「体験的アイデンティティ感覚」の研究における、「科学的」研究方法の問題点は、客観性を目指すことで、感覚や体験を理解することに普遍的な言葉を用い、事象や現象を切り取り分類し、定義することによって結果が得られたつもりになり、研究者の観点がそこに入り込んでいるにも関わらず、研究者は記述に登場しないことであるとし、その解決案として、①脱客観性、②研究者の体験を用いること、③素朴に具体的な内容を記述すること、④それらを用いて考察し「体験的アイデンティティ感覚」に関する知見を導くこと。に該当する、エピソード記述法をベースとした、フォーカシングを取り入れた半構造化面接の手法を提案した。

キーワード：体験的アイデンティティ感覚、エピソード記述法、フォーカシング、現象学

1. 問題と目的

アイデンティティ感覚は、自分自身との斉一性と連続性の感覚であり、その斉一性と連続性を他者と共有することの自覚であり (Erikson, 1959), 「わたし」がわたしであることについて得られる感覚である (飯沼・神田, 2016)。Eriksonがアイデンティティ理論を提唱した後、心理学的研究の上ではアイデンティティは人生を通して取り組まれる問題であり、人生のステージにおいて都度自己を再構成し続ける動きとされてきた (西平, 1993)。

アイデンティティ感覚に関する研究は、本邦では特に西平 (1973, 1983) や大野 (1984) によって進められてきた。各々立場や手法は異なるものの、アイデンティティ感覚を複数の構成要素に分割し、構成要素を包括する1つの概念としてアイデンティティ感覚を表現している。

上記のような、感覚を構成要素に分割して論じる研究とは異なったアプローチとして、飯沼・神田 (2016) は「体験的アイデンティティ感覚」を提案した。「体験的アイデンティティ感覚」は「わたし」がわたしであることを行為主体が直接的に体験することであり、その体験は意識

* いいぬま かずき 準研究員・株式会社 Core

化されたものを手掛かりに感覚全体を意識化していく過程を経て感じることでできる素朴な体験が「わたし」にとって「しっくりくる」感覚”（飯沼・神田，2016；p113）であり，日常的な素朴な言葉によって表現される感覚である。「体験的アイデンティティ感覚」は木村（1988）の「あいだ」の概念やGendrin（1981）のフォーカシングとプロセスモデルから着想を得たものであり，個人と個人が存在する場との相互作用によって生じるものである。また，「体験的アイデンティティ感覚」は個人と場との間の相互作用によって生じ，個人が感覚を体験する場は個人の体験が構成するという循環の関係にあり，個人の感覚と場は相互作用する一つのゲシュタルトであるという考え方から，感覚をプロセスとして捉えるものである。この「体験的アイデンティティ感覚」はアイデンティティ感覚をひとが感じるままに扱おうとするアプローチであり，本邦で言えば西平（1983），大野（1984）らとは，数値や分類に加工し理念系の上で操作する従来の「科学的」アプローチと異なる。

「体験的アイデンティティ感覚」における研究手法は未だ確立されておらず，このアプローチで研究を進める方法を提示する必要がある。そのため，従来「科学的」であることを重視した研究の問題点を挙げた後，問題を解決する研究法を提示する。

2. 「体験的アイデンティティ感覚」研究の方法論の構築

ここでは，「体験的アイデンティティ感覚」の研究を行うに当たって，従来の「科学的」研究法における課題を挙げる。

「体験的アイデンティティ感覚」の研究を行うに当たって，「科学的」研究における問題点は，客観性を目指すことにあると考えられる。人の心を対象とする「科学的」研究は，主観的な対象を科学的に研究するため，概念や手続き，結果，考察，記述を客観的とすることが望ましいとされると考えられる。ここで目指される客観性には，定義，普遍性，透明性，再現性が含まれる。

客観性を目指すことによって下記が生じると考えられる。①普遍的な言葉による説明。②事象や現象を切り取り，分類して記述する。③研究者，観察者排除。つまり，感覚や体験を理解することに普遍的な言葉を用い，事象や現象を切り取り分類・定義し，研究者自身や研究者の主観は記述に登場しないことである。以下，それぞれについて説明を加える。

2.1. 普遍的な言葉による説明

客観的な記述を目指すことで使用される言葉は，どこでも使用される普遍的な言葉であろう。誰にでも理解可能な形を目指すため，対象が発した言語データは最終的には普遍的な言葉によってまとめられる。しかしながら，対象者本人の表現に変更を加えることで，本人の体験・本人が意味した内容，読み取られる意味も変容することが危惧される。

人間は普段利用する言葉は，研究や論文上で扱う言葉と異なっており，より本人の感覚を表現するに値するのは普段利用している言葉の方であると考えられる。そこで使用される言葉は，その場における使用のされ方によって意味を持つものである（Gergen，1999）。

たとえば，就活をしていて，自分のやりたい仕事ではなく，待遇だけを見て応募をしている自分に気づいたという状況で，本人は，“自分の進む先に霞や霧がかかっている，その霞がどんどん自分に近づいてきて飲み込まれていく感じ”と表現した場合，論文上ではこれを分類して，“自己斉一性の欠如”と書かれてしまう事が想定される。この場合，“霧に飲み込まれていく感

じ”と表現した意図や状態は研究者に理解されず、読み手に伝わらない問題が生じると考えられる。この例のように、普遍的な言葉で表現し、本人の発語・記述・行動の仕方やそれらが生じた場面、場面との関係性が記述から失われた場合、本人の感覚の意味は捻じ曲げられてしまうと言える。

また、本人の感覚表現を反映できない問題とは別に、普遍的な感覚を表現すること自体の問題も存在する。それは、感覚は普遍的でないと考えられるためである。

“自分の進む先に霞や霧がかかっている、その霞がどんどん自分に近づいてきて飲み込まれていく感じ”

“町の中で目的のものを探しているけど、自分が立っている場所が固くなくてスポンジやゼリーみたいなイメージ”

以上の2つの表現を普遍的な言語で示す場合、「自己の斉一性の欠如」と表現可能であろう。しかし、ある言葉の意味は個人と使用される文脈との相互作用によって異なる考えると、上記の2つの表現が発生した場面や発した人間が異なる場合、2つの表現の意味は異なると言える。感覚も個人とその場との相互作用によって生じるものであるため、発する場面や人間が異なるのであれば、そこで本人が体験する感覚も異なると言える。すなわち、同一に表現可能な感覚であるとしても、文脈や発する人間が異なれば生じる感覚も異なると考えられ、感覚が普遍的であるとするには疑問である。

このように、論文上で誰にでも理解可能な、普遍的な言語によって表現される感覚は、体験する本人たちの感覚とはズレがある可能性があり、個人間によっても微妙な差異が存在すると思われる。そのため、感覚を普遍的なものとして記述することは困難であると言える。

2.2. 事象や現象を切り取り、分類して記述する問題

「科学的」研究では、研究対象とする現象を切り取り、その部分を定義し、さらに構成要素に分類して構造化する手法をとる場合がある。現象を切り取り分解しなければ、データを得るための実験的、操作的な手法を使うこと、客観的にデータを示すための対象を定義することが不可能であり、それらが不可能であることは、研究の透明性が得られず、研究方法及び結果の再現性を確保することが不可能であると言える。そのため、「科学的」研究では、事象や現象を切り取り、分類し、定義した後に記述していると推測される。

しかし、現象を切り取っていく手法を取ることは、感覚を表現する場と個人との間の相互作用を捉える視点を限定することとなり、本来観察されるはずであった事柄が抜け落ち、「体験的アイデンティティ感覚」を捉えられずに終わる可能性がある。

感覚は個人と状況やその場の中で生じる統一体 (Van den Berg, 1972) であると考えられる。Weizsäcker (1950) と木村 (1988) は主観的内容と状況との相互作用の無限の円環関係について述べ、Gendlin (1997) は、人間は有機体と環境の相互作用そのものであり、全体性をもったプロセスによって構成されることを述べている。これより、感覚を捉えるためには個人と場面と間の相互作用を捉え、事象や現象を区切られたものとせずにプロセスを伴った1つの統一体として理解する必要があると考えられる。すなわち、現象を切り取り分類し、限定された範囲でのみ言及することは上記の方向性とは逆行し、感覚を捉えることを困難にしていると言える。

2.3. 研究者・観察者排除

「科学的」研究で求められるのは事象を上から見下ろし物を言う視点であり、研究者の主観的な言及や、研究者の主観的内容に関して言及することは客観的ではないと排除される。本人の感覚そのものを捉えようと試みる「体験的アイデンティティ感覚」の研究においては、研究者を報告の内容から排除することは、「体験的アイデンティティ感覚」から遠ざかることとなる。その理由は、①「体験的アイデンティティ感覚」が個人と環境の相互作用から生じるものであり、環境には研究者の存在自体も含まれるため、②「体験的アイデンティティ感覚」の報告は研究者を通して表現され、報告されるためである。

「体験的アイデンティティ感覚」は個人と環境との間の相互作用によって生じるその場のゲシュタルトである。観察・インタビュー上で生じる「体験的アイデンティティ感覚」を記述するのであれば、そこには直接接している研究者の姿があり、その場を設定し、その場に挑む研究者の意志が存在していると言える。その場から研究者の存在が除外されれば、その場は研究者が存在しない場へと変化し、その人が感覚を体験する場は全く異なる場となると考えられる。すると、構成されるゲシュタルトは異なり、表現される感覚は全く異なったものになると想定される。すなわち、研究者を除外してなされた報告は、異なった状況を報告することとなり、実際とは異なる報告となると言える。報告や分析から研究者・観察者を除外することは、そこで表現されるはずの現象が表現されず、誤った報告をすることに繋がる問題があると推察される。

また、「体験的アイデンティティ感覚」の報告は研究者を通して表現され、報告されるため、研究者を分析や記述に含めないことで、「体験的アイデンティティ感覚」のその人の感覚そのものを捉える目的は果たされないと考えられる。

それは、客観的記述における感覚と本人の体験する感覚との間にはズレがあり、そのズレを研究者は主観を含む解釈を交えて表現し直す役割を持つためであると考えられる。調査で提示された言語に対してもっている、研究者が意図する意味と調査対象者が認識する意味が一致するとは限らないことが問題として挙げられる。言語には通常、意味を指し示し伝達するための道具であるシニフィアンと、意図され伝達される意味そのものであるシニフィエの二つの側面がある (Saussure, 1949)。たとえば、紙上に書かれた「音楽」という言葉は日常的にわれわれが聞いている、道具によって生み出されるあの音楽を表していると考えられる。すなわち、「音楽」や「オンガク」という表現がシニフィアンであり、「音楽」という概念がシニフィエとなる。言語を使用するひとの文脈によってそのひとのもっているシニフィエは異なるのであるが、それは単に一つのシニフィアンとシニフィエの対照関係の差異だけではなく、文化や経験によってそのひとのもっているシニフィエの内容自体が異なる (Saussure, 1949)。ひとは言語のやりとりによってコミュニケーションしているため、言語に込められた意味を相互に伝達し合っていることは確かであるが、インタビューや質問紙等を介して交わされるシニフィアンに込められたシニフィエが同じであると言うことはできないと考えられる。ひとが語った言語によって示されるシニフィエと相手はその語りから読み取る言語的意味は同じように表現することが可能だとしても、微妙にニュアンスが異なっているのである (大倉, 2008)。すなわち、語られた言語によって示される意味は社会的意味とは異なっている可能性があると考えられる。すると、対象者本人の表現を対象として分析するだけでは、対象の感覚そのものを捉えることは不可能であると言える。

感覚は単なる言語的意味で理解することが困難であり、「体験的アイデンティティ感覚」も同様であると言える。そして、「体験的アイデンティティ感覚」を表現可能にするのは、その感覚

を構成し、その場を体験した研究者・観察者の体験であると考えられる。「体験的アイデンティティ感覚」において、本人の感覚そのものの意味を担っているのはこの相互作用である。相互作用する場に存在し、表現される感覚を共に作り上げる研究者・観察者は、この相互作用の一部であり、この相互作用を体験し、この相互作用を通じて対象者の体験と繋がっている（鯨岡、2006）。研究者・観察者はその場で体験した対象者の感覚を、その場に関する記述を交えながら解釈し、その際の自らの状態も含めて記述し、表現し直すことで本人の感覚が表現されると考えられる。

このように、本人の感覚の意味を解釈し、表現し直す役割を持つ研究者の主観を含む解釈を分析・記述から排除することは、表面的な言語の意味の分析に終始し、語り手の感覚を捉えることを不可能にしている問題があると指摘できる。

以上、「体験的アイデンティティ感覚」研究において、従来の「科学的」研究を適用する問題点として客観性を目指すことを挙げ、客観性を目指すことにより3点の問題が発生することを示した。それらは、①普遍的な言葉による説明によって、異なるニュアンス、異なる感覚内容を持つ言葉を同意味として表現する問題、②事象や現象を切り取り、分類して記述することで、個人と環境が相互作用するゲシュタルトとして、全体性を持ったものである感覚を捉えることができない問題、③分析・記述において研究者、観察者排除によって実際とは異なった報告をし、「体験的アイデンティティ感覚」を捉えるために必要な研究者の解釈を除外することになる問題である。この3点に共通する問題は、「体験的アイデンティティ感覚」が個人と場の相互作用によって生じる、個別的で素朴な感覚であることに対し、その相互作用を素朴な言葉を用いて記述し、研究者の主観性を記述することを許さないことにあった。すなわち、①脱客観性、②研究者の体験を用いること、③素朴に具体的な内容を記述すること、④それらを用いて考察し「体験的アイデンティティ感覚」に関する知見を導くことが解決案となることが考えられる。

次項において、上記3点の問題点を克服する方法論を示し、「体験的アイデンティティ感覚」の研究に適した研究手法を提示する。

3. 「体験的アイデンティティ感覚」研究の研究法の提示

前項において、「体験的アイデンティティ感覚」研究における、「科学的」研究における客観性の問題点を指摘し、「体験的アイデンティティ感覚」の研究法の方向性を示した。それは、①脱客観性、②研究者の体験を用いること、③素朴に具体的な内容を記述すること、④それらを用いて考察し「体験的アイデンティティ感覚」に関する知見を導くことであった。本項では、脱客観性に伴う、研究者の主観性の重要性を論じた後、上記4点に該当する、ベースとなる研究法として、鯨岡（2005, 2012, 2013）及び大倉（2008）のエピソード記述法を提示し、それを「体験的アイデンティティ感覚」研究のために適した形に変更を加える。

3.1. 研究者・観察者の主観の重要性

前項でも触れたが、客観性を目指さない研究方法を用いるにあたって、研究者の主観性の重要性について述べておく。

本人の体験は個人と環境の相互作用によって生じ、生じた感覚はさらに個人と環境との間の相互作用を導き、この相互作用はさらに体験を導いていく。体験と相互作用の間にはこのような循

環があるが、研究者・観察者はこの相互作用を構成する一部であり、相互作用からある体験をしている主体でもある。そして、語り手本人と同様の循環は研究者にも存在し、この体験はその場と相互作用を生じさせ、相互作用が体験を生じさせる循環となっている。ここで相互作用する場は語り手と研究者の間で共有しており、その場において各々が影響を与え合っている。すなわち、語り手の体験は研究者の体験のゲシュタルトの一部であり、研究者の体験を紐解いていくことは、語り手の体験を導く助けとなると考えられる。

このような語り手本人と研究者を含む体験と相互作用の循環はWeizsäcker (1950) によってゲシュタルトクライスと称された。Weizsäckerのゲシュタルトクライスから、木村 (1988) は「あいだ」の概念を導き、木村の「あいだ」の概念から着想を得て、鯨岡 (2006) は「ひとがひととをわかる」ということに関する研究へと繋げていった。鯨岡の研究において、上記の個人と個人との間の体験の循環について触れられているが、この循環によってある人間が他者を「わかる」のだと論じている。本論で言えば、語り手本人の体験を研究者・観察者が体験することを示す。鯨岡 (2006) はその場にいる特定のひとの主観的な感覚や意識といったものが、その場にいるほかのひとの主観に入り込んでいくことで、他者の主観的内容が「わかる」と説明した。鯨岡はこれを根源的両義性と呼ぶ。これは、人間は「私」に向かう志向性と「あなた」に向かう志向性をもつが、「あなた」にもまた「あなた」自身と「私」が存在し、「私」の内部に存在している「あなた」は、「あなた」を「私」を通して認識した姿である。すなわち、鯨岡が根源的両義性と呼び、他者の主観的内容が「わかる」のは、「あなた」内部に存在している「私」も「あなた」を通して認識した姿なのであるという、「私」と「あなた」との間の体験上の循環が生じていることによってである。

すなわち、根源的両義性と同様の循環は、語り手本人と研究者との間でも生じており、研究者の体験を通じて、語り手本人の体験が「わかる」と言える。そのため、語り手本人の体験そのものを扱う「体験的アイデンティティ感覚」の研究において、研究者・観察者の主観的体験を分析・記述することは重要であると言える。

3.2. エピソード記述法

上記で示した、「体験的アイデンティティ感覚」の研究法の方向性を示す4点、①脱客観性、②研究者の体験を用いること、③素朴に具体的な内容を記述すること、④それらを用いて考察し「体験的アイデンティティ感覚」に関する知見を導くこと。に該当し、本論で示す方法論のベースとなる研究として、エピソード記述法 (鯨岡, 2005; 2012; 2013) を挙げる。

エピソード記述法は“研究者自身が一人の生きる人間としてその場に関わり、その接面において得られるもの、つまり自分の身体を通して感じられるもの、間主観的に感じ取られたものを手掛かりに、人が人とともに生きることの意味を探ろうと” (鯨岡, 2013: p.33) するものである。ここでとられるフィールドに臨む態度は「関与観察」と呼ばれる (鯨岡, 2005)。これは、フィールドにおいて主観性をもった一実践者でありながら、その場で何が生じたのか、状況を客観的に把握する研究者としての視点ももち合わせるような実践と研究についての態度である。ここで、研究者や実践者は実践の場における実践者の役割を担い、インタビューの場において単なるインタビュアーとして語りを引き出していくだけではなく、エピソードを創出する場へと参入し、エピソードや語りに登場する一人の主体としてその場に関与するのである (鯨岡, 2013)。

エピソード記述法では、研究者を通じて体験された語り手の体験を記述し、その背景となって

いるものを明らかにすることで、エピソードや語り手が語り手本人や研究者にとってどのような意味をもっているのかを明らかにしていく分析手法を取る。研究者に体験されたものの背景となっている、研究者と語り手との間の関係性や研究者が研究に臨む態度、背景理論、研究者や語り手の持つバックグラウンド等を検討しながら、インタビュー場面を観察する。これを「メタ観察」と呼び、「メタ観察」によって提示されるより広い領域においてもつ意味は「メタ意味」と呼ばれる（鯨岡，2005）。「メタ観察」を行って語り手本人の体験を捉えるためには、そこに関与する研究者の主観的内容を介する必要がある。さらに、「メタ観察」を行う人間はエピソードや語りが生じる場に居合わせた人間である必要がある。それは、そのエピソードや語りに対して生じた体験を表現可能であるのはエピソードやインタビューの場に関与した本人であり、エピソードや語りになんらかのインパクトを受けた本人だけが、そこで生じた情動や意味を観察可能なためである。そのため、エピソード記述における観察は「他の誰にでも」可能とはならず、観察者の代替不可能性をもっている（鯨岡，2005）。

記述の方法としては、下記の通りである。①関与観察の場がどういう場であるかを明示し、エピソードの背景を記述する。②研究者が関与観察の場に臨む立場、目的、理論的関心。③可能な限り「あるがまま」を時系列に沿って描き出す。④エピソードを切り出す動機が読み手に判るように描き出す。⑤対象の体験を掴んだ部分と掴めなかった部分を丁寧に描き出す。⑥人の動きや雰囲気など、自身の身体を通して感じられたことをエピソードに盛り込む。

3.3. 「体験的アイデンティティ感覚」研究の研究法

前項で示したエピソード記述法は、客観性を目指さず観察者の代替不可能性を持ち（①）、研究者の体験とその背景から「メタ観察」を行い（②）、体験の中身や人の動き、雰囲気などを「あるがまま」に具体的に記述する（③）、「メタ観察」を用いて「メタ意味」を導く（④）研究法であり、前項で提示した4つの要件を満たす方法論である。本論ではこの研究法をベースとして、「体験的アイデンティティ感覚」の研究法を構成する。

大倉（2008）や鯨岡（2006）と同様に非構造化面接やフィールドワークによって得られた語りとエピソードを「メタ観察」することによって、「体験的アイデンティティ感覚」を捉えることは可能であると考えられるが、より「体験的アイデンティティ感覚」に迫るために半構造化面接とする。

構造化は①自身が最近よく思うことについて話してもらい、②表出された事柄を対象化して話し合い、③表出されたことばや表現を別の表現に言い換えてもらったり、どのようなときに感じる感覚と似ているかを説明してもらったりし、④ハンドルとなる言葉や表現について語り合うことでインタビューを進めるというものである。インタビューは1人の語り手に対して複数回行うこととするが、回数は決めずに研究者がインパクトのある体験を経験し、「メタ観察」、「メタ意味」を導くことをゴールとする。以下、構造化の視点をそれぞれ説明する。

①最近よく思うことについて話してもらう

研究対象は「体験的アイデンティティ感覚」であり、これは「わたし」が私であることに対して「じっくり」くる感覚である。そのため、「わたし」に対してフォーカスして語りを展開する必要がある。しかし、Van den Berg（1972）によれば、ここで「あなたについて教えてください」という種類の質問にしまうと、詳細に理解されるばかりでなく、本人が感じた内容、本人自身についてよくわからなくなってしまう。彼によれば、語り手本人について知りたい場合、

感覚の周辺にある事物、その人の見る世界について説明を求めるべきである。その人の世界についての説明から、自身が対象化されてくるとされる。そのため、語り手本人の世界を対象とし、それを介して本人にフォーカスさせるため、最近よく思うことについて話してもらうことにする。

②①で表出された事柄を対象化して語り合う

①で表出された事柄から、そこで生じた感覚についてフォーカスして語り合い、その人が体験する「わたし」に関する感覚について深掘りしていくが、ここでも本人自身について教えてもらうという立場をとらず、感覚を対象化してそれについて語り合うスタンスをとる。

大倉（2008）によれば、自身について語る際、語り手自身を対象にして内省してもらうよりも、自身とは離れた場に対象化して語り合うことが効果的である。そのため、本人が表出した感覚について、共に語り合うインタビューの方法をとる。

③表出されたことばや表現を別の表現に言い換えてたり、どのようなときに感じる感覚と似ているかを語り合うことでインタビューを進める

②において感覚について語り合うが、その中で表出されたことばや表現の言い換えや類似する状況について話し合う。これは、ある感覚の全体像をつかみ、より「体験的アイデンティティ感覚」に近づいていくために実施する。

そもそも、ある状況において体験される感覚は表現が難しいものであり、素朴な言語を用いた具体的なことばでなければ表現が困難である（木村、1970）。こうした表現が難しいが相互作用を導く感覚を表すものとして、Gendlin（1962）のフェルト・センスがある。フェルト・センスとはつねに感じられてはいるが未だ言語によって分化されていない、輪郭がはっきりしない漠然とした感じであり、前概念的で身体的に感じられる感覚とされる。フェルト・センスは変化する感覚であり、ひとが自身の体験を直接照合することで「今、ここ」で感じることでできるものである。フェルト・センスにはこれまでの主観的な経験や今後体験される感覚や行動を導くものもあり、フェルト・センスを体験することで次の行為や感情の体験が生じる（Gendrin, 1962）。このような、漠然としていて前概念的なフェルト・センスに触れることで、自身がその場で体験していることに注意を向けて象徴化するプロセスがフォーカシングである（Gendrin, 1981）。ここで表現される微妙なニュアンスの違いを持つ感覚も、フェルト・センスと同様に表現が難しいものであると想定され、「体験的アイデンティティ感覚」研究において体験される感覚を対象化するために、フォーカシングの手法を用いることは妥当であると考えられる。

ここでは、フォーカシングの手法の内、特にハンドル探しを援用する。エピソード記述法における、表現された体験を基礎として、その周辺領域、その時の場面の状況を手掛かりに「メタ観察」していく分析過程と類似し、親和性が高いと考えられるためである。

すなわち、フォーカシングのハンドル探しを援用し、②で表現された感覚に関する言葉を基本とし、その感覚を表すにふさわしい言葉を言い換えや類似表現を探ることによって探索していく。そのハンドルとなる感覚から「体験的アイデンティティ感覚」へと近づいていくこととする。

④ハンドルとなる言葉、表現について語り合う

ハンドルとなる言葉や表現を見つけたら、その感覚について語り合い、その人本人の世界についての話を展開していく。ハンドルを基礎として自由に話を展開し、そのハンドルが変化した時、語りの内容やそこで感じられる体験の展開を観察し、その状況で研究者が感じられることも

同時に観察する。

①～④をインタビューで繰り返し、語りの内容、その時の状況、研究者の体験を踏まえメタ観察し、メタ意味を導いていく。記述の仕方はエピソード記述（鯨岡，2005）に準ずることとする。

また、本研究の対象は青年、特に大学生とする。これは、社会的にも自己形成・アイデンティティを青年・若者の問題として重要視されているためである。浅野（2009）によれば、アイデンティティは若者の問題として扱われ、青年はアイデンティティを捉えるバロメータであることを論じている。心理学者の溝上（2010）もまた、アイデンティティに関する議論を相対化し、アイデンティティ概念が適応パラダイムを基礎とする社会の視点によって構築されていることを論じた。すなわち、アイデンティティ研究の対象として青年が重視されることは、発達上の主題の視点のみならず、社会問題を解明する視点からも重要であると言える。また、西平（1983）や大野（1984）らが対象とした大学生を対象とすることによって、彼らの記述との差異がより際立つと考えられるため本研究では大学生を対象とする。

3.4. 「体験的アイデンティティ感覚」研究の妥当性の検討

客観性を目指さない研究手法であるため、本研究は妥当性・一般化とは縁が無い研究とみなされる可能性がある。この点においては、本研究においても鯨岡（2005）や大倉（2008）同様、了解可能性に求めることとする。対象としている母集団である青年がエピソード記述に共感し、そこから考察したことを了解するとすれば、この手法によって捉えられたものは了解される範囲において一般化可能であるとするのである。ここでの妥当性とは、目的に合った研究を行うことにある。本研究の目的は、対象の「体験的アイデンティティ感覚」を捉え、そこから知見を導くことにある。対象となる青年たちが本研究によって導かれた記述と考察を読み、それに共感するとすれば、「体験的アイデンティティ感覚」を青年が感じるそのままに捉えることができた研究であると考えられ、アイデンティティ感覚を青年が体験するままに捉えるアプローチである「体験的アイデンティティ感覚」を捉える目的に合った研究であったと推察される。すなわち、その場合には本研究は妥当であったと言えるのである。一般化においては、妥当性同様に、共感が得られた、青年が研究の成果を了解した範囲において一般化可能であると言える。すなわち、了解可能性や一般化についての議論は、本研究の成果を対象となった母集団に還元して初めて論じられる類のものである。そのため、本研究においては、論文等によって報告するのみではなく、対象とする青年たちへ還元することが義務となり、研究法の内に含まれるものである。

3.5. 本研究の意義と今後の展望

本研究の意義と今後の展望について述べることでまとめに代えさせて頂く。本研究では、「体験的アイデンティティ感覚」の研究における「科学的」研究の問題点を、客観性を目指すことで、感覚や体験を理解することに普遍的な言葉を用い、事象や現象を切り取り分類し、定義することによって結果が得られたつもりになり、研究者の観点がそこに入り込んでいるにも関わらず、研究者は記述に登場しないことであるとし、その解決案として、①脱客観性、②研究者の体験を用いること、③素朴に具体的な内容を記述すること、④それらを用いて考察し「体験的アイデンティティ感覚」に関する知見を導くこと。に該当する、エピソード記述法をベースとした、フォーカシングを取り入れた半構造化面接の手法を提案した。

本研究の意義は青年への還元までの展望を含む長い視座と、本論文のみの視座によるものの2

種類が考えられる。本論文のみの視座であれば、アイデンティティ感覚研究に対する「科学的」研究の問題点を指摘し、現象学的・体験的な研究方法を再構成した点にある。今後、本研究によって提示された方法による議論が展開されることが望まれる。

青年への還元までの展望を含む長い視座に関して述べると、青年自身の自己理解への貢献、青年を対象とした実践者の青年理解への貢献がある。青年自身の自己理解に関しては言うまでもないが、実践者が青年たちは実際には何をどのように感じ、生きているのかを把握しながら、自らの実践をさらに向上させることに貢献すると考えられる。

上記の研究の意義とも重なるが、今後の展望としては、本研究で提示した研究方法を用いて青年の「体験的アイデンティティ感覚」に関する知見を導き、その後、得られた知見を青年に還元、了解可能性の検討を実施する。

引用文献

- 浅野智彦(編著)(2009). リーディングス日本の教育と社会18:若者とアイデンティティ 日本図書センター.
- Erikson, E. H. (1959). Identity and the Life Cycle: selected papers. Psychological issues, Vol. 1. New York. International Universities Press. (小此木 啓吾(訳)(1973). 自我同一性 誠信書房)
- Gendrin, E. T. (1962). Experiencing and the creation of meaning: A philosophical and psychological approach to the subjective. New York. Free press of Glencoe. (筒井健雄(訳)(1993). 体験過程と意味の創造 ぶっく東京)
- Gendrin, E. T. (1981). Focusing. 2nd ed. Toronto: Bantam Books. (村山正治・都留春夫・村瀬孝雄(訳)(1982). フォーカシング 福村書店)
- Gendlin, E. T. (1997). The responsive order. A new empiricism. Man and World, 30 (3), 383-411. (斎藤浩文(訳)(1998). 応答の秩序—新しい経験主義. 現代思想, 26 (1), 172-201)
- Gergen, K. J. (1999). An Invitation to Social Construction. Sage. (東村知子(訳)(2004). あなたへの社会構成主義 ナカニシヤ出版)
- 飯沼和希・神田信彦(2016). アイデンティティ感覚に関する一考察—直接体験的なアイデンティティ感覚— 生活科学研究, 38, 109-114.
- 木村 敏(1970). 自覚の精神病理 紀伊国屋書店.
- 木村 敏(1988). あいだ 弘文堂.
- 鯨岡 峻(2005). エピソード記述入門 東京大学出版会.
- 鯨岡 峻(2006). ひとがひとをわかるということ—問主観性と相互主体性— ミネルヴァ書房.
- 鯨岡 峻(2012). エピソード記述を読む 東京大学出版会.
- 鯨岡 峻(2013). なぜエピソード記述なのか 東京大学出版会.
- 溝上慎一(2010). 現代青年の心理学—適応から自己形成の時代へ— 有斐閣選書.
- 西平直喜(1973). 青年心理学 共立出版.
- 西平直喜(1983). 青年心理学方法論 有斐閣.
- 西平 直(1993). エリクソンの人間学 東京大学出版局.
- 大倉得史(2008). 語り合う質的心理学—体験に寄り添う知を求めて— ナカニシヤ出版.
- 大野 久(1984). 現代青年の充実感に関する一研究 教育心理学研究, 32 (2), 100-109.
- Saussure, F. de. (1949). Cours de linguistique generale. Charles Bally et Albert Sechehay. (小林英夫(訳)(1972). 一般言語学広義 岩波書店)
- Van den Berg, J.H. (1972). A Different Existence; Principles of Phenomenological Psychopathology. Pittsburgh, Duquesne University Press. (早坂泰次郎・田中一彦(訳)(1976). 人間ひとりひとり 現象学的精神病理学入門 現代社)
- Weizsäcker, V. V. (1950). Der Gestaltkreis. (木村 敏・浜中椒彦(訳)(1975). ゲシュタルトクライス: 知覚と運動の一元論 みすず書房)